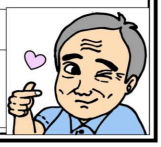
国語学習プリント　　date：　　年　　月　　日

学習内容：文学を学ぶ前に・・・

詩の種類と表現技法（修辞法）その１

＿＿年＿＿組＿＿番　氏名



《詩の種類》

① 文体（使われている用語）からみた種類

・**文語詩**―文語（古典に使われている言葉）体で書かれた詩 ▼現代では使われない言葉を用いている詩

※仮名遣いとは別物です。古い仮名遣いがされているからといって、すべてが文語詩であるわけではありません。古典でまた説明します。

・**口語詩**―口語（現代で使われている言葉）体で書かれた詩

② 形式から見た種類

・**定型詩**―音数に一定のきまりのある詩 ※文字数ではない　音数律

・**自由詩**―音数にとらわれない不定型の詩

・**散文詩**―行分けにとらわれない散文（普通の文章）形式の詩

③ 内容から見た種類

・**叙(抒)情詩**―作者の感情を主観的にうたう詩

・**叙景詩**―風景を写生的にうたう詩

・**叙事詩**―出来事や事実を客観的にうたう詩

▽詩の種類（形式）をはかるとき、おもに①文体と②形式を組み合わせたもので問われることがあります。

ア 文語定型詩　イ 文語自由詩　ウ 文語散文詩

エ 口語定型詩　オ 口語自由詩　カ 口語散文詩

などです。

☆次の詩は何語何詩だろうか？（①から　②から）

文語定型詩

ふるさと　高野辰之

うさぎおいし　かのやま
こぶなつりし　かのかわ
ゆめはいまも　めぐりて
わすれがたき　ふるさと

いかにいます　ちちはは
つつがなしや　ともがき
あめにかぜに　つけても
おもいいずる　ふるさと

こころざしを　はたして
いつのひにか　かえらん
やまはあおき　ふるさと
みずはきよき　ふるさと

口語散文詩

村　三好達治

鹿は角に麻縄をしばられて、暗い物置小屋にいれられてゐた。何も見えないところで、その青い眼はすみ、きちんと風雅に坐ってゐた。芋が一つころがってゐた。

そとでは櫻の花が散り、山の方から、ひとすぢそれを自轉車がしいていった。

脊中を見せて、少女は藪を眺めてゐた。羽織の肩に、黒いリボンをとめて。

口語自由詩

野原はうたう　工藤直子

ねがいごと　たんぽぽはるか

あいたくて
あいたくて
あいたくて
あいたくて

・・・
きょうも
わたげを
とばします

▼「」で表された内容のひとかたまり（通常一行程度空けて区切られる）文章でいうところの「段落」にあたるものを詩では「連」という。

▼定型詩では、

五・七を繰り返す調子を五七調という。

七・五を繰り返す調子を七五調という。

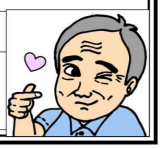
国語学習プリント　　date：　　年　　月　　日

学習内容：文学を学ぶ前に・・・

詩の種類と表現技法（修辞法）その２

＿＿年＿＿組＿＿＿番

氏名



《詩の表現技法》

①比喩法

対象をほかのものにたとえて印象を強める技法

▼形式上（見た目）の分類

ア 直喩法（明喩）　「ようだ」「みたい」などの語を用いてたとえる技法

イ 隠喩法（暗喩）　「ようだ」「みたい」などの語を用いずにたとえる技法

▼たとえる対象上の分類

・擬人法　人間でないものを感情のある人間に見立てて表現する技法

・擬物法　人間を人間以外の生物、非生物などにたとえて表現する技法

・擬態語　物事の様子をたとえる技法

ゆらゆら　のそのそ　ぴかり　など

・擬声語　音や声をたとえる技法

わんわん　ガラガラ　ぴゅう　など

②反復法

同じ言葉をくり返し、印象を強める技法

明るい方へ／明るい方へ。

③対句法

形の似ている語句や意味の似ている言葉を並べてリズムを整え、印象を強める技法

青い ⇔ 空

白い ⇔ 雲

通常同じ構成上に相対する異なる語句を配置する。

④倒置法

語句の順序を入れかえて、意味を強調する

船が散歩する／口笛を吹きながら

⑤体言止め

句末・行末を体言（名詞）で止めて余韻を残す

ああ　両肩に柔軟な雲

⑥押韻

行の初めや行末など、一定のところに同じ音（同じ響きの語）を置き、詩のリズムを整える

頭韻　おまへの歩みを　ささへるであらう

脚韻　おまへは　そして　自分を護りながら泣くであらう

⑦呼びかけ

対象や読者に呼びかけ、身近な感じを強調する

おうい雲よ

⑧省略法

述語などの一部を省略し、余韻を残す

言い足らないことによって余韻を残す。体言止めも同じ。

そらからおちた雪のさいごのひとわんを……

◎対比

二つの性質あるいは量の違ったものを掲げ、その違いが著しくなることにより印象を際立たせる効果

対句もこれを用いたもの。

さまざまな技法を用いて表現される作品を味わおう。

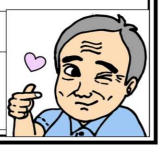
国語学習プリント　　date：　　年　　月　　日

学習内容：**文学を学ぶ**

詩「ふしぎ」　金子みすゞ

＿＿年＿＿組＿＿＿番

氏名



ふしぎ

金子 みすゞ

わたしははふしぎでたまらない、
黒い雲からふる雨が、
銀にひかっていることが。

わたしははふしぎでたまらない、
青いくわの葉たべている、
かいこが白くなることが。

わたしははふしぎでたまらない、
たれもいじらぬ夕顔が、
ひとりでぱらりと開くのが。

わたしははふしぎでたまらない、
たれにきいてもわらってて、
あたりまえだ、ということが。

Q1 この詩は何連構成か。

四連構成

▽では、声に出してうたってみよう。

Q2 この詩で用いられている表現技法

・倒置法
黒い雲からふる雨が、銀にひかっていることが、わたしはふしぎでたまらない。

・反復法
わたしはふしぎでたまらない。

・脚韻　～ない、～が。

対句法とはいえない点

Q3 この詩の種類（形式）は、何だろうか。【難題】

種類をしぼらせない工夫がなされているようにみえる

Q4 各連で、作者がふしぎであると言っていることを書こう。

・一連　黒い雲からふってくる雨が、黒ではなく銀色であること

・二連　青いくわの葉をたべているかいこが青くならず白いこと

・三連　だれもいじってないのに夕顔が、勝手にぱらりと開くこと

・四連　（わたしが不思議だと思っていること）をだれに聞いても不思議だと思わないこと　がふしぎ

Q5 四つの連の中で異様に（変わっていると）見える連は

四連

◇たれにきいても とあるが「何を」きいたのでしょう。

一連・二連・三連にあるようなわたしが不思議だと思っていることを

◆この詩から受け取れるメッセージとは

自分の純粋な思いや感覚を大事にすること

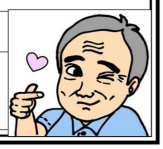
物事を決まりきった型にはめて閉じ込めないで

国語学習プリント　　date：　　年　　月　　日

学習内容：**文学を学ぶ**　教科書の意図を知る

＿＿年＿＿組＿＿＿番

氏名



金子みすゞ　の 他の詩

私と小鳥とすずと

金子 みすゞ

私が両手をひろげても、
お空はちっとも飛べないが、
飛べる小鳥は私のように、
地面を速く走れない。

私がからだをゆすっても、
きれいな音は出ないけど、
あの鳴る鈴は私のように、
たくさんな唄は知らないよ。

鈴と、小鳥と、それから私、
みんなちがって、みんないい。

こだまでしょうか

金子 みすゞ

「遊ぼう」っていうと
「遊ぼう」っていう。

「馬鹿」っていうと
「馬鹿」っていう。

「もう遊ばない」っていうと
「遊ばない」っていう。

そうして、あとで
さみしくなって、

「ごめんね」っていうと
「ごめんね」っていう。

こだまでしょうか、
いいえ、誰でも。

積もった雪

金子 みすゞ

上の雪
さむかろな。
つめたい月がさしていて。

下の雪
重かろな。
何百人ものせていて。

中の雪
さみしかろな。
空も地面(じめん)もみえないで。

この詩からうかがえる金子みすゞさんのもののとらえ方の新しい点とは？

とかく、右か左かと二者択一を迫れて分別される世のとらえ方とは違う視点で主観的にとらえるところ